

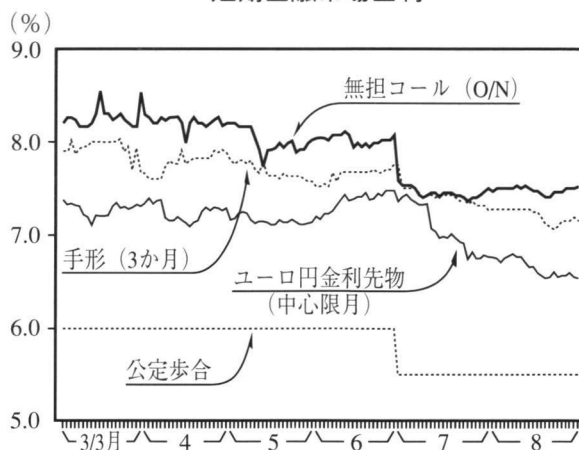
# 金融市場動向 (平成3年8月)

## 1. 短期金融市場

8月中のオーバーナイト・レート（無担コール）は、概ね7.5%前後で小動きに推移した。また、ターム物（手形3か月物）は、中旬まで横ばいで推移した後下旬にかけて低下した。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）も低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は35兆2,191億円と前月（35兆7,691億円）を下回った。

短期金融市場金利



## 2. 資本市場

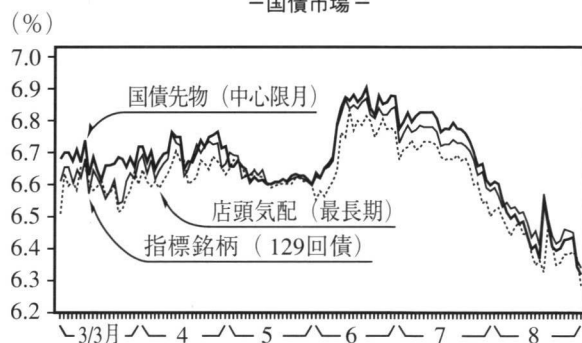
8月の国債利回り（129回債）は、19日にソ連政変を受けて急上昇した（16日6.40%→19日6.57%）ものの、月中を通じて概ね低下した（8月末6.34%＜前月末6.58%＞、国債先物中心限月6.32%＜同6.60%＞）。

国債の出来高（1営業日平均）をみると、現物（店頭取引）、先物とも前月を上回った。

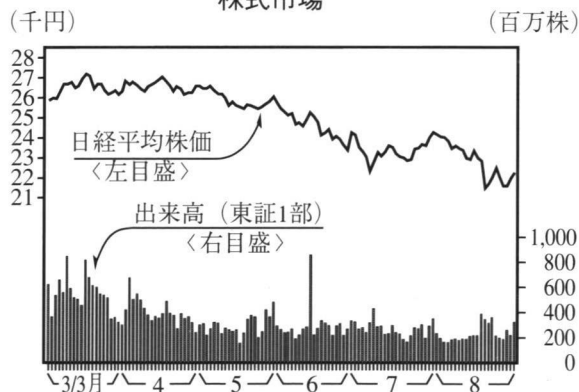
株式市況（日経平均株価）は、中旬まで軟調地合いで推移した後、19日にはソ連政変を嫌気して急落（19日終値21,456円、前日比△1,357円）。その後は一進一退の動き（月末終値22,335円、前月末比△1,785円）。株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は2.3億株と、低水準であった前月（2.6億株）

既発債市場利回り

—国債市場—



株式市場



をさらに下回った。

起債動向をみると、長期国債（10年＜価格競争入札分＞）については、クーポンレートが0.3%引下げられた（8月債6.6%→9月債6.3%）ものの、証券会社中心に玉確保の動きがみられたため、全体としてはほぼ前回並みの応札結果となった（募入平均利回り6.300%＜前月6.561%＞、応募倍率4.08倍＜同4.25倍＞）。また、8月の短期国債は、6か月物が比較的落ち着いた入札結果となった一方、3か月物は証券会社中心に現先玉確保の動きがみられたため前向きな入札となった（8月6日入札分＜6か月物＞、募入平均利回り7.288%、応募倍率2.07倍、8月14日入札分＜3か月物＞、同7.237%、同3.42倍）。

エクイティ市場での発行（8月払込み分、国内市場発行分）については、企業の起債意欲が根強いこともあって、転換社債、ワラント債とも高水準の発行となった。

国内公募事業債の発行は、これまでの前倒し発行の反動もあって、前月比大幅に減少した（7月2,900億円→8月200億円）。

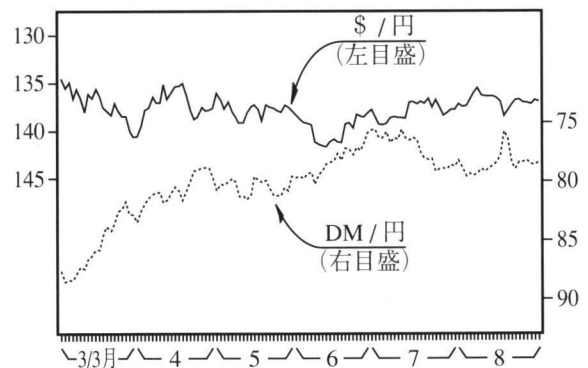
なお、8月起債分より公募普通社債（NTT債を除く）の引受手数料が引下げられた（たとえば、償還期限7年超のものについては、額面100円当り1円60銭から1円40銭に引下げ）。

### 3. 外国為替市場

8月の円相場（対米ドル直物相場、終値）をみると、19日にソ連政変を嫌気して一時急落した（16日終値136.90円→19日138.40円）ものの、概ね137円を挟んで横ばい圏内で推移し、結局136.88円で越月した（前月末137.83円）。また、マルクの対円相場（ニューヨーク市場、終値）は、独政策金利引上げ観測から底堅く推移した後、ソ連政変を受けて急落したものの、その後は回復し、78.33円で越月した（前月末78.75円）。

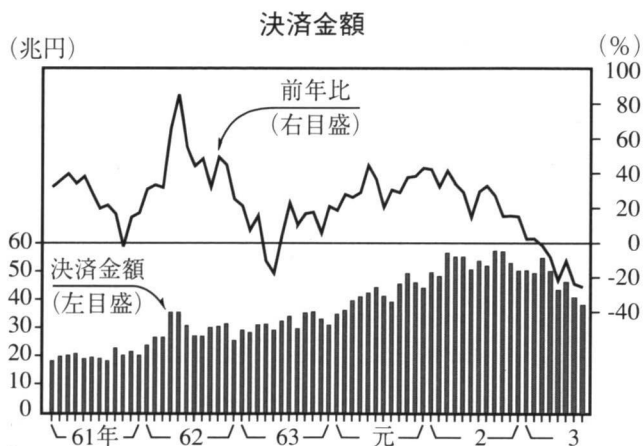
この間、外国為替市場出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は133.3億ドルと、低水準であった前月（161.2億ドル）をさらに下回った。

外国為替市場



#### 4. 決済

8月の資金決済の金額（1営業日平均）は、前年に比べて減少した（手形交換高<東京>前年比△30.5%、全銀システム取扱高同△9.2%、外為円決済交換高同△28.5%、日本銀行当座預金受払額同△8.2%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振決口座振替）は、移転登録は前年比減少した（△25.1%）ものの、振決口座振替は前年比増加（+11.4%）。



(注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

#### 5. 資金需給、金融調節

8月の資金需給は、銀行券要因が4,969億円の余剰（前年同7,460億円）となったものの、財政要因が租税の受入れを主因に1兆7,137億円の不足（前年余剰2,308億円）となったため、全体でも5,803億円の不足（前年余剰1兆2,095億円）となった。

これに対し日本銀行は、貸出、債券およびTBの買入れ等により資金を供給した。

9月の資金需給（国債発行織込み前）については、銀行券要因が1,000億円程度の余剰となる見通し（前年不足2,609億円）であるほか、財政要因についても、地方交付税交付金の大口支払い等が見込まれることから、1兆2,200億円程度の余剰となる見通し（前年同2兆4,240億円）。この結果、全体では1兆6,900億円程度の資金余剰と予想される（前年同2兆3,258億円）。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

7月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+3.4%と、前月より0.3%ポイント低下した。これは、財政要因が若干マネー押上げに働いたものの、貸出の伸び率が低下したほか、郵便貯金等マネー対象外金融資産へのシフトがみられたことによるもの。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が小口MMC、大口定期預金を中心に引続き低下した一方、預金通貨は伸び率を高めた。

8月の銀行券平残前年比は、+1.6%と引続き低い伸び（前月+2.1%）。

8月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、第二地銀協加盟行）は、前年比+2.6%と前月（同+2.9%）をさらに下回り、既往最低の伸びとなった。また、貸出平残（都・長銀、信託、地銀、第二地銀協加盟行）も、前年比+5.5%と既往最低の伸び率となった（前月+6.0%）。

## 7. 貸出・預金金利

7月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、短期金利が短期プライムレート引下げ（7月16日以降、7.875%→7.625%）を受けて3か月連続で低下した一方、長期金利は長期プライムレート引上げ（7月1日、7.7%→7.9%）の影響等から前月比上昇したため、長・短総合では小幅ながら上昇した（6月7.609%→7月7.613%）。

また、日本銀行は当月より新規貸出約定金利（全国銀行）を発表することとしたが、7月中に実行された貸出にかかる新規貸出約定金利をみると、長期金利は前月比若干上昇したものの、短期金利が低下したため、長・短総合では5か月連続で前月比低下（6月7.917%→7月7.843%）。

この間、7月の大口定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（6月7.547%→7月7.391%）。

（平成3年9月11日、調査統計局）

